

令和八年度

滝川第二中学校 プレテスト 問題

国語

(五十分・百五十点)

注意事項

- 1 問題は1ページから14ページまであります。
- 2 解答は、すべて解答用紙の枠内わくないに記入しなさい。
- 3 「開始」の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- 4 受験番号と氏名を、解答用紙と問題冊子の表紙に正しく記入しなさい。
- 5 「終了」の合図で筆記用具を置き、監督かんとくの先生の指示に従いなさい。

受験番号							氏名
		—					

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(指定された字数には、句読点その他の符号ふごうもそれぞれ一字としてふくみます。)

「ハインリッヒの法則」とは、米国の労働安全の先駆者であるハーバート・ウィリアム・ハインリッヒ(Herbert William Heinrich)によって提唱ていしょうされた法則です。

損害保険会社の技術・調査部の副部長だったハインリッヒは、労働事故の報告書を何千件も調査した結果、あることに気づきました。

それは「一人の人間に似たような事故が三三〇回起きると、そのうちの三〇〇回はケガをしないもの、二九回は軽いケガをして、一回は①重傷を負うようなケガである」という法則でした。

一九二九年、ハインリッヒはこの法則を論文で発表し、その後、出版した著書『Industrial Accident Prevention, A Scientific Approach (労働災害の防止、科学的アプローチ)』(日本の翻訳本の書名は『災害防止の科学的研究』)でも紹介しょうかいして、広く知られるようになりました。

「ハインリッヒの法則」のなかの「ケガをしない三〇〇回の事故」は、のちに日本で「ヒヤリ」「ハット」という言葉で表現されます。

まるで外国語をカタカナで表現したような言葉ですが、その表現の由来は「ケガはしないが、ヒヤリとしたり、ハットするような小さな事故」という意味です。

ハインリッヒの法則(三三〇回の事故のうち、ケガのない事故が三〇〇回、軽いケガの事故が二九回)に基づいて考えると、たとえば「ヒヤリ」や「ハット」のようなレベルの出来事であっても、それが一〇回起こったとすれば、すでに一回の軽いケガを伴う事故が起こっていてもおかしくないのです。さらに、もしおよそ三〇回の軽いケガの事故が起こっていたとしたら、重大な事故が起こっても不思議はないわけです。

(A)、たかが「ヒヤリとした」とか「ハットとした」程度の事故だからといって、「あー、ケガしないでよかった」と安心して、そのことを忘れてしまうことを続けていると、いつかはケガをする事故が起きてしまう。軽いケガをするような事故への対処を怠おこたったり、対応が不完全だったりすると、労働事故の要因はさらに成長して、やがては非常に深刻な事故の発生にもつながりかねないという警告になっているのです。

ですから、重大な労働事故を X に防ぐためには、「ヒヤリ」や「ハット」を軽視することなく、きちんと認識にんしきして、上層部に報

告すると同時に、その「ヒヤリ」「ハット」のレベルの事故がなぜ起こったのか、どうすれば対処できるのか、きちんと考え行動しなければならぬというのが、この②「ハインリッヒの法則」から与えられる重要な教訓なのです。

実は、「労働事故」だけでなく「失敗」についても、「失敗におけるハインリッヒの法則」とでも呼べるような③同様の法則が当てはまります。なぜなら、失敗には労働事故と同じく、「放置しておく」と成長する」という特性があるからです。

ある小さな失敗が時間の経過とともに大きくなっていくプロセスを細菌やカビ等の増殖に見立てて考えてみましょう。

ある培地（現場）に小さな「失敗の核（原因）」が発生したと想像してみてください。この核は小さいので、周囲の人間はもちろん、のちに失敗する本人にすら発見も認識もされませんし、なんらかのYを与えることもありません。

この核が時間の経過とともにZを蓄え、培地（現場）の上で「※萌芽」します。④失敗がなんらかの現象となつて表に出るわけです。（B）、ここでやっとひとは「なんか、まずくない？」と感じます。

この「萌芽」の段階で、原因を究明して除去するとか、これ以上は大きくならないように修正を加えるなど、適切な対処を行えば、将来に起こるかもしれない大失敗をXに防ぐことができるでしょう。しかし、大抵は、⑤あまり大ごとにならず、取るに足らない出来事として看過されます。

その後、放って置かれた失敗の萌芽はどんどん大きくなり、やがて「失敗の※閾値」を越えて「※顕在化」、つまり、誰が見てもわかる（気づく）規模の「大失敗が起こる要因」にまで成長します。さすがに当事者も周囲の人も「大きな失敗」が起きないように対処しようと考えますが、そこまで放置してしまうと、もう間に合わないことが多く、最終的には破裂して、※甚大なダメージを周囲に与えてしまうことになるのです。

（C）、⑥この失敗の要因である核は、培地（現場）に無数に発生します。それらが萌芽すると、お互いに影響し、関係しながら、時間の経過とともに成長し、合体し、さらに大きな失敗の要因へと育っていきます。

結果、最終的には「ある人がタイプの同じ失敗を三三〇回すれば、三〇〇回は当事者が「まずいな」と認識する程度でのミスで、二九回は周囲の人たちにも気づかれるくらいの失敗で、一回は取り返し

のつかない大きな失敗」という状況になります。

つまり、「ハインリッヒの法則」とよく似た「失敗におけるハインリッヒの法則」が想定できるのです。

逆に言えば「失敗におけるハインリッヒの法則」が示しているのは「⑦取り返しがつかないほどの失敗が起きたとしたら、それがなんの前触れもなく突然起こったように見えても、実は、その背後に二九の中くらいの失敗が存在し、さらには潜在的に三〇〇の※些細な失敗がある」ということです。

つまり、後悔してもしきれないような失敗をしてしまったとき、後からきちんと調べてみると、その大失敗につながるような中くらいの失敗を何十もしていたことがわかり、さらには報告されるどころかきちんと認識すらされていなかった何百もの失敗が出てくるというわけです。

その仮定に立つて考えると、もし「まずいな」「やつちやつたかな」という程度の失敗体験があったときに、同種の小さな失敗が起こらないように、失敗の要因や現場の環境などを見直して、きちんと防止策を実施しておけば、失敗の要因の成長はその時点で阻止することができます。しかし、もしそこで事態を軽視して、そ

のまま放置すると、しばらくして、よりダメージの大きな失敗の芽（要因）を生じることになります。

その失敗の芽にさえも気づかなかったり、あるいは対応が遅れたりすれば、やがて失敗の要因は閾値を越え、顕在化し、破裂して、取り返しのつかない大失敗へとつながるといのが「失敗におけるハインリッヒの法則」の示すところなのです。

（畑村洋太郎「やらかした時にどうするか」より。）

注 萌芽：草木などが芽を出すこと。物事が起ころうとするしる

しが現れること。

閾値：ある現象や反応が起こるかどうかを分ける境目となる値。

顕在化：おもてにあらわれて存在する様子。

甚大：程度がきわめて大きいこと。

些細：あまり重要でない様子。

問一（A）（C）に入ることばとして最も適当なものを、次のア～オから選び、記号で答えなさい。（同じものは二度選ばません。）

ア	それでも	イ	すると	ウ	つまり
エ	しかも	オ	たとえば		

問二 — 線部①「重傷」と成り立ちが同じ熟語として最も適当なもの

なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 注意 イ 解放 ウ 早春 エ 非常

問三 二つの X に共通して入ることばとして最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 即座 そくざ イ 自然 ウ 頻繁 ひんぱん エ 未然

問四 — 線部②『ハインリッヒの法則』から与えられる重要な教訓とありますが、その内容について説明した次の文の

と b に入ることを、本文中からそれぞれ

a は四字で、 b は十三字で書きぬきなさい。

看過できない a を防ぐためには、 b を軽視せず、

上司への報告や原因の追究をしつかりしなければならぬという教訓。

問五 — 線部③「同様の法則」とありますが、どのような法則ですか。それについて説明したものとして最も適当なものを、

次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 小さな失敗を何回も繰り返すと、必ず大きな失敗に変わる法則。

イ 小さな失敗に気づいて対処すれば、二度と失敗しなくなる法則。

ウ 大きな失敗の陰には、多くの小さな失敗やミスが隠れている法則。

エ 大きな失敗を一度でもすると、その後に小さな失敗が続く法則。

問六 Y に入ることばとして最も適当なものを、本文中から

四字で書きぬきなさい。また、 Z に入ることを最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア エネルギー イ アピール
ウ メッセージ エ スピード

問七 — 線部④「失敗がなんらかの現象となって表に出る」と

ありますが、どのような対処を行えば、将来の大失敗を防ぐことができますか。本文中の言葉を使って五十文字以内で書きなさい。

問八 — 線部⑤「あまり」がかかることばとして最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 大ごとに イ されず

ウ 足らない エ されます

問九 — 線部⑥「この失敗の要因である核は、培地（現場）に無数に発生します。」とありますが、この文の主語を答えなさい。

問十 — 線部⑦「取り返しがつかないほどの失敗」とほぼ同じ意味をもつことばを、本文中から十五字で書きぬきなさい。

問十一 次のア～エのうち、本文の内容に合うものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 損害保険会社の技術・調査部の部長だったハインリッヒは、労働事故の報告書を何千件も調査して、「失敗におけるハインリッヒの法則」を発見した。

イ 「ヒヤリとした」り、「ハッとした」程度の事故については、今後起こってもケガをすることはないので、不安を感じる必要はない。

ウ 「失敗の核」が成長し、「失敗の閾値」を越えて「顕在化」したときにはじめて、ひとは「なにかまずいことになっている」と感じ始める。

エ 小さな「失敗の核」は、発生したばかりの段階では、周囲の人間だけでなく、のちに失敗する本人にも発見・認識されない。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(指定された字数には、句読点その他の符号もそれぞれ一字としてふくみます。)

暦こよみたちの学年に、ひと組だけ①双子ふたごの姉妹がいる。

暦のおかあさんも双子なので、暦にとっては気になる存在だ。

双子のうち、おねえさんのほうは暦と同じクラス。名前は羽根はね梨華りかちゃん。みんなからフルネームで「ハネリカ」って呼ばれている。ただフルネームで呼ばれているだけなのに、(A)カリスマ性のありそうな響きひびで、暦はうらやましい。

妹のほうは、暦とは別のクラスだ。そもそも、双子のふたりが同じクラスになったところを、暦は見たことがない。ひよつとして先生たちの計算だろうか。同じ顔の子が教室の中にふたりいたら、混乱しちゃうから？

妹のほうは、みんなからはふつうに「羽根さん」って呼ばれている。

ハネリカと羽根さんは、「なんちゃって姉妹」の暦となごみちゃんとは違って、それはもうそっくりだ。どちらがどちらか。顔だけだったら、暦には区別がつかない。髪型かみがたもそっくり同じセミロングだ。ただ、表情や身に着けているものや、あとは声やしゃべり方

で、すぐにわかる。

ハネリカは声がすごく大きくて、自分の思ったことをなんでもはつきりしゃべるし、足が速くて、はやりのおしゃれが得意だ。だけど、羽根さんはおとなしくって、(B)しゃべらない。足が速いのか遅いおそのかは、暦は同じクラスになったことがないから知らないけれど、たぶん遅い。そう思ってしまうくらい、おっとりしている。洋服もちよつとちぐはぐで、「なんかダサイ……？」と思ってしまう。

暦は、クラスメイトのハネリカとは、(C)仲よしじゃない。でも、ハネリカはリーダーシップがあつて気も強いし、クラスでいちばん目立っている女子だから、うまくつきあつていかないと、つていう気がする。

「あ、ハネリカのキーホルダー、かわいいね。フワフワの天使の羽だ」

「ほんとだ、どこで買ったの？」

いつもハネリカといっしょにいる立見たつみさんと川澄かわすみさんが言った。ハネリカは得意そうに、

「いいでしょー。ママが買ってくれたの。ちよつと大きすぎるかなって思ったんだけど……」

「そんなことないよー。そのくらい大きいほうがかわいいよ」

「いいなあ、そういうかわいいのが似合ってる」

「べつにそんなことないよ」

「もしかして、由梨ゆりっぺもおそろい？」

近くで聞いていた暦は、うつ、と思った。「由梨っぺ」というのは、妹のほうの羽根さんのあだ名。あだ名なんだけど、本人の前では呼ばれないあだ名だ。なぜなら羽根さんを由梨っぺと呼ぶのは、羽根さんのことをバカにするときだけだから。

「えー、そんなわけないじゃん」

「そうだよ。由梨っぺ、こういうの嫌いきらそうじゃん」

「ハネリカんちに遊びに行っても、いつも本ばかり読んで、わたしたちのことバカにしてるじゃん」

「そう、そう」

「双子なのに似てないよねえ」

くすくすくす。

そうだろうか。暦は心の中で頭をかかえてしまう。バカにしているのは、羽根さんのほうなの？ 暦にはそうは思えなかった。少なくとも、羽根さんは言葉に出してバカにしたりはしない気がする。でも、立見さんも川澄さんもそう感じているのなら、実は羽

根さんにも②そういう部分があるのかな？

今、勇気を出して「わたしはそうは思えない」って言うてみたらどうだろうか。

そんな考えがちらりと頭に浮うかんだけれど、（D）口には出せないのだった。

そのキーホルダーが消えたのは、その日のお昼のことだった。

「すみませーん！ 聞いてくださーい！」

「ハネリカのキーホルダー、どこかで見た人いませんかー？」

机を班のかたちからもとにもどしていた暦は、おやつと思った。あんなに大きなものが、なくなったりするだろうか。立見さんと川澄さんは、ハネリカのかわりに大声で呼びかけている。

「体育からもどったら、なくなってたんだって」

「どこかに落ちてない？」

暦がふとハネリカのほうを見ると、すぐ近くにいて、ばっちり目が合った。

ハネリカは暦に向かってなにか言いたそうな表情で、一度口を開けたけれど、また閉じた。

「落とし物ボックスは？」

暦はハネリカに聞いてみたけれど、答えがかえってこない。聞かえなかったのかな、と思って、暦はもう少し大きな声で言い直した。

「落とし物ボックス、見た？」

それでも返事がかえってこなかったから、^③あ、もしかして無視されてる？　って、気がついた。暦は無視されたことにおどろいてなにも言えなかったけれど、^{しゅんじ}瞬時にさとした。

どうやらわたしが疑われている。

なんで？　どうしてだろう。あのとき、近くで話を聞いていたからだろうか。たったそれだけで？

クラスのみんながざわざわしはじめた。「そうなの？」「なんで？」

「三ヶ田さん？」^{みけ}「しーっ。聞こえるよ」

ああ、気が遠くなる。このまま、自分がとったのではないと証明できないまま、教室でひとりぼっちで過ごしている自分。かなりみじめだ。

「X」

床井くんが憤慨^{ふんがい}して言ってくれたので、暦はちよつとだけ心が軽くなった。だけど、自分がとったんじゃないっていう証拠^{しやうこ}はない。

床井くんに向かって、ハネリカが言った。

「でも、体育着に着がえたあと、最後に教室を出たの、三ヶ田さんだった」

「おれに言うなよ。ミケに言えよ」

「さっきわたしたちが話してたとき、こっち見てたし」

「だから、ミケに直接言えって」

ハネリカはあくまでも暦には話しかけたくないらしい。

たしかに、体育の前の休み時間、この教室から最後に出たのは暦だった。暦は着がえるのが遅いし、ほかの子と一っしょに移動したりしない。友だちがいらないというのではない。クラスのみんなと友だちだ。でも、トイレに行きたいときはひとりで行くし、ひとりでいるのがはずかしいとは思わない。そういう性格なのだ。でも、このときほど、だれかといっしょにいればよかったと、思ったことはなかった。

「わたし、とってないよ」

だってあれ、あんまりかわいいと思わなかったし。なーんて言ったら、ハネリカは怒り^{おこ}だすだろう。それでかわりにこう言った。

「ああいうかわいいのって、わたしには似合わないし」

そう言ってみて、暦はいやだなと思った。ああいうかわいいのは、ハネリカにしか似合わない。そう言っているようなものだ。気の

遣い方が、わざとらしい。

ハネリカはそう言われて悪い気はしなかったみたいで、はじめて暦のことを見て言った。

「ほんと？」

「うん」

「……そっか。ごめん、疑って」

ハネリカは、あっさり謝あやまった。

暦はハネリカと仲よしじゃなくても、こういうところは好きだった。人の言うことをちゃんと信じてくれるのだ。ただ、さっきみたいに少しおだてられてからじゃないと、素直すなおになつてはくれないのだけれど……。

ハネリカの後ろで、立見さんと川澄さんが、不満げな顔をしている。そういえば、いつも羽根さんの悪口を言っているのは、ハネリカというよりは、どちらかというとこのふたりのほう。

でも、暦だつて、さつきハネリカの機嫌きげんをとるようなことを言ってしまったので、人のことは言えないのだった。

そのとき、教室の前のドアから、意外な人物が顔をのぞかせた。

「梨華ちゃん、いる？」

妹のほうの羽根さんだった。そして、羽根さんが手に持っている

ものを見て、その場にいた何人かが、

「あつ」

と言った。天使の羽！ ハネリカがあわてて妹にかけよる。

「由梨ちゃん、それ……」

「さっきの休み時間に、廊下ろうかに落ちてたよ」

「エッ、ウソ」

ハネリカは動揺どうようしている。

「だめじゃん、落としたら。せつかくおそろいで買ってもらったばっかりなのに」

「ごめん、ごめん」

弱気なはずの妹に、勝ち気なハネリカがしかられている。

それを見て、みんなの目が点になっている。④主しゅに、立見さんと

川澄さんの目が。

その理由は暦にも想像ができた。だつて、妹とおそろいなんかじゃないつて、さつき言つてたもんね。

それにしても羽根姉妹つて似ているなあ。暦と※なごみちゃんのおかあさんたちも、子どものころの写真はそっくりだった。今は髪型とか体型とかのせいで、それほどでもないけれど。もちろん、いっしょに住んでいても、⑤ふたりを間違えることなんて、どう考

えでもありえない。

妹が自分の教室に帰ったあと、ハネリカは気まずそうにこちらにもどってきた。そしてまずは暦に謝った。

「三ヶ田さん、ごめん。ありがとうございました」

「うん、よかったね」

これで終了。暦とハネリカは大丈夫だ。だってもともとそれほど仲よくないから、こじれるほどの関係性が、ないのだった。⑥問

題は、あっちだ。

立見さんと川澄さんは、顔を強張らせている。

暦は推測した。つまりこういうことだ。立見さんと川澄さんは、ハネリカの機嫌をとるために、冴えない妹である「由梨っぺ」の悪口を言っ、てあげて、いた。ハネリカもきつと、クラスでのふたりとの関係を優先させて、本当は仲よしの妹の悪口を聞いてあげて、いた。

うわー、どうなっちゃうの？

ドキドキしながら成り行きを見守っていると、床井くんが笑顔で話しかけてきた。

「ミケ、よかったじゃん。疑いが晴れて」

「床井くん。そういえば、さっきはありがとう」

「いいってとこい」

なにを言っているんだろう。あ、もしかして、

「……いいってことよ？」

「それそれ。さすがミケ」

「わかりにくいよ」

床井くんのボケに気を取られて、暦は一瞬ハネリカたちのことを忘れてしまった。

気がついたら、いつもみたいに三人で楽しそうにおしゃべりしていた。ホツとしたような、がっかりしたような。がっかりっていうのは、三人の関係がもとにもどったことにはなくて、関係がもとにもどる瞬間を見逃したことにがっかりしたのだ。

それ以来、羽根さんの「由梨っぺ」という Y は聞かなくなつた。

(戸森^{ともし}するこ「ゆかいな床井くん」より。)

注 なごみちゃん：暦のいとこ。暦のお母さんと双子の姉妹である女性の子ども。

問一 (A) (D) に入ることばとして最も適当なものを、次のア～カから選び、記号で答えなさい。(同じものは二度選べません。)

- | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|
| ア | なんだか | イ | それほど | ウ | そっくり |
| エ | わんさか | オ | もちろん | カ | ほとんど |

問二 — 線部①「双子の姉妹」とありますが、その姉妹について説明した次の文の a と b に入ることばを、本文中から a は五字で、b は八字で、それぞれ書きぬきなさい。

姉は、暦と a の子で、声が大きくてはつきりしゃべり、足も速い活発な子。妹は b 性格の子で、洋服などもさえていないと感じられる。

問三 — 線部②「そういう部分」とありますが、その内容を本文中の言葉を使って、二十字以内で書きなさい。

問四 — 線部③「あ、もしかして無視されてる？」とありますが、こう思ったときの暦の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 自分のことを疑っているハネリカを腹立たしく思う気持ち。

イ 自分が疑われるようなことをしたせいだと、あきらめる気持ち。

ウ まったく身に覚えもないことで疑われてしまい、とまどう気持ち。

エ 三人が自分をおとしめようとしていることに気づき、絶望する気持ち。

問五 — X に入る会話文として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア アホか。ミケはそんなことしないぞ

イ ハネリカ。早く落とし物ボックスをさがせよ

ウ おまえな。きつとどこかで落としたんだよ

エ あんな。そんなに大事なものを、持ってくるなよ

問六 — 線部④「主に、立見さんと川澄さんの目が」とあります

が、それはなぜですか。次の文の c に入ることばを、本文中のことばを使って、四十字以内で書きなさい。

勝ち気なハネリカが、弱気なはずの妹にしかられていることと、
c ことに驚いたため。

問七 — 線部⑤「ふたりを間違えることなんて、どう考えても

ありえない」とありますが、次の文の d に入ることばを、だれがどの「ふたり」を間違えることがありえないのかを明らかにして二十五字以内で書きなさい。

d を間違えることはありえない。

問八 — 線部⑥「問題は、あっちだ」とありますが、どのような問題ですか。その内容として最も適当なものを、次のア

エから選び、記号で答えなさい。

ア 悪口を聞いていたことがばれたハネリカと妹の関係性。

イ 罪をなすりつけ合う立見さんと川澄さんの関係性。

ウ 妹の悪口を言った立見さんたちとハネリカの関係性。

エ 事実が明らかになったあとの床井くんと暦の関係性。

問九 Y に入ることばを、本文中から三字で書きぬきなさい。

問十 次のア～エのうち、本文の内容に合うものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 立見さんと川澄さんは、ハネリカが持っている天使のキーホルダーをとっても気に入ったので、自分たちもほしいと思っていた。

イ 体育の後、キーホルダーがなくなったことで、ハネリカはいつも一人で行動をする暦を疑って、すぐ返すように問いつめた。

ウ 羽根由梨さんは、ハネリカが落としたキーホルダーを暦のクラスに持ってきて、もっと大切にしなければならいとハネリカをいさめた。

エ 床井くんは自分が暦の疑いを晴らしてあげたことを喜んだが、暦が礼を述べたときには照れたので、冗談を言っじょうだんてごまかした。

三 次のそれぞれの文の□に入る生き物の名前をひらがなで答えなさい。

(1) いつも百点ばかりの山下くんがテストで十点を取るなんて、
□も木から落ちるといふこともあるんだな。

(2) 立つ□あとをにごさずといふから、しつかり掃除そうじをして帰ろう。

(3) 沢田さわださんはくじ引きでパソコンが当たったけれど、あの人
はパソコンを使えないので、□に小判こばんだな。

(4) 南みなみさんとは好きなものが同じで、とても□が合う。

(5) 田中たなかくんが余計なことばかり言つて、先生に怒られているよ。
□も鳴かずばうたれまいつてこと知らないのかな。

四 次の各問いに答えなさい。

(1) 次の文の――線部の用法と同じ用法の文を、それぞれの
ア、エから選び、記号で答えなさい。

- ① これくらいの数かずの漢字ならきつと覚えられる。
② 大会で優勝して、多くの人から声をかけられる。
③ 明日の午後に、先生が家に来られる。

ア いなかにいる母のことが案じられる。

イ 講演では、戦争を体験した方が体験談を語られる。

ウ あの店では、特設した場所の特価品が売られる。

エ なぜか休みの日だけは早く起きられる。

(2) 次のそれぞれの漢字の成り立ちとして正しいものを、それ
ぞれ後のア、エから選び、記号で答えなさい。

- ① 本 ② 男 ③ 味 ④ 竹 ⑤ 銅

ア 象形文字 イ 指事文字 ウ 会意文字 エ 形声文字

五 次の――線部の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して

書きなさい。

- (1) 作者の略歴を調べる。
- (2) 屋内にあるテニスコートで練習する。
- (3) 快晴にめぐまれていい気分だ。
- (4) 鋭い集中力を武器にして試合にいどむ。
- (5) 険しい山道を進む。
- (6) 市街地のリョツカ運動に参加する。
- (7) 優勝する可能性があるチームをヒキいる。
- (8) ショウガイ物競走に参加する。
- (9) 目的地までのオウフク切符きっぷを買う。
- (10) 新聞をハイタツする人の足音が聞こえる。